

1 江戸時代は、戦の無い時代！



歴史が好きな子どもにも、大人にも、一番人気があるのは
戦国時代や幕末です。



戦や動乱、知恵と武力を存分に発揮して、血沸き肉躍る場面の数々、一夜にし
て状況を変え、時代がダイナミックに変化していく、これこそ歴史の醍醐味！
というかたも多いでしょう。

それに比較すると、江戸時代は人気がありません。

江戸時代と言えば、時代劇のイメージ。水戸黄門をはじめとして時代劇は勧善懲悪
だから、筋は決まっているし・・・、庭先のチャンバラでは、
ちっとも迫力が無い・・・そう思われて、人気が無いのが
江戸時代なのではないでしょうか？



でも、・・・視点を改めて、今の時代から考えてみましょう。

第二次世界大戦が終わって70年を過ぎました。その間、平和な日本が築いたも
のは、戦争中にできなかった平和の構築と、機械を作り出す技術の発達です。
戦争中が良かったから、もう一度戦争が起きた方がいい…そう考える人は今、ほと
んどいません。戦争で失ったものは、人命はもちろん、生産力の低下、労働人口の
減少、・・・戦争中・戦後の貧しさ、いかに食べていくことが大変だったか、多
くの人が述べています。実際、私の叔母にあたる母の兄弟も二人・・・ひとりには栄養
失調で赤ちゃんの時、一人は薬が無くて小学生の時に、亡くなりました。祖母は、
いつも二人の亡くなった娘たちを思い、泣いていました。

平和な70年こそ、今の日本を作りだした発展の原動力です。

もう一つ考えてみたいことがあります。

産業革命を勉強すると気付きますが、近代からの 300 年の間に、科学技術の発展とともに、戦争＝つまり武器の技術も、怖いほどの発展をとげていきます。

産業革命を生み出した鉄や蒸気機関は、巨大兵器を発明しエネルギー革命を進め、原子力にまで発展させました。必要は発明の母。戦争が戦争のための技術を発達させたのです。

江戸時代は、全く違う時代です。昭和後半から平成への 70 年どころか、260 年もの間、平和が日本全体で続いたのですから、武器を発達させる必要は全くありませんでした。腰に差す日本刀も、江戸の終わりには、形だけのものになっていたと言われます。

武器を全く発達させなかった江戸時代が 260 年、明治から今までは 150 年、ということは、戦争を続けた近現代よりも江戸時代の平和の方が、日本人が体験している時間は長いのです。このこと、おもしろいと思いませんか？

よく子どもたちと戦争について学ぶと、人類は戦争が好きだからやめられない・・・そう悲観的な感想も出てきますが、平和が続き、武器の改良を考えずに済んだ 260 年という時間が、実は目の前にあるのになかなか気づきません。

では、人々は、その 260 年もの年月の間に、武器ではなく、どんな技術を発達させていったのでしょうか。

2 江戸時代のイメージを問い直せ！

江戸時代が私たちに残してくれた財産や技術を考える前に、その前提を考えておきましょう。

江戸時代を否定的にとらえる見方は、明治からずっと続いていました。

戦後も、学問の立場からは、封建時代として、古い因習にとらわれた時代と考える立場。

そして、政治の立場からは、明治時代(から今でも)に政治の権力をにぎった薩摩・長州・諸藩の政治家たちが、徳川政権を否定しなくてはいけない時代ととらえる

立場でした。

そこから、新しい物こそ正しい、ヨーロッパ文明こそ進んでいる、そういう考え方が生まれ、今も私たちをとらえているように思います。

しかし、今の学問の成果は、江戸時代を様々な視点で再評価、あるいは新しい評価を始めているようです。

一つ、私自身も持っていたイメージが訂正された事実を、お話ししましょう。山梨県の古文書を調べている先生に教えていただいたことですが、村の具体的な古文書を読みながら、「その年の年貢の量は、村と役所の交渉で決まった」という話をうかがいました。「五公五民」とか、年貢の割合を「生かさず殺さず」なのだと聞いてきた農民支配のイメージが、大きく異なる文書でした。

その年の天候や村のそれぞれの家の事情も考慮して、村の年貢の量を決めたというのです。…つまり今の組合の団体交渉、毎年の春闘のようなことを、すでに、村の名主たちと役所で行っていたのです。その駆け引きは文書で読む限り、村側も役所側も納得できるように、ちゃんと妥協と譲歩がされたものでした。

村側が、とても年貢は払えないと突っぱねて終わりではなく、その分は次の年にと、繰り越した借料の形で文書に残し、役所の面子も立ててありました。そして、次の年に必ず納めさせられたわけではなく、次の年にも同じように不足量として書いてある、…いつ私が返しきるのですか？と伺うと、先生は「う～ん、返しきることはないでしょう」とおっしゃいます。

つまり、年貢として、継続して入る量があることが大事で、むしり取っているわけではないというのが、先生の解説でした。今の時代と変わりません。

また、年貢は村全体で量を決められるので、母子家庭の家や老人・病人の家は、周りの家がある程度肩代りしながら納めたりして、村の団結が重要で、相互扶助もあった・・・ということもわかりました。

だとすると、村や藩の納税に将軍や幕府が直接関与できるわけではないということがわかります。今の中央集権国家とは大きく異なります。

それぞれの藩に自治を任された地方自治だからこそ、まず、農業に力を入れ、領民が飢えないために、生産力をあげることを考えなければならなかったと言えるでしょう。(地方自治体の長は地域に根ざさない限り支持されないという力の限界があります。江戸時代は、実質、中央集権ではないからこそ、260年も平和が続いたのでしょう。)

幕末から明治にかけてやって来た外国人が、口をそろえて、「日本人は陽気で明るい、いつも笑い転がっている」、モースなどは「子どもが大事にされる子どもの天国」と言っているくらいです。子どもが大切にされたのは余裕があったからこそ。

大量生産がやって来る前の時代に、地方自治で成功した国、平和を維持し続けた国・・・私は、そういうイメージで、江戸時代のご先祖様が作り上げた財産を、見つけたいと思いました。

2 あなたは何色が好きですか？

あなたは、何色が好きですか？

なぜ、その色が好きなのでしょう？

自然の中で、その色から、イメージするのは何でしょうか？

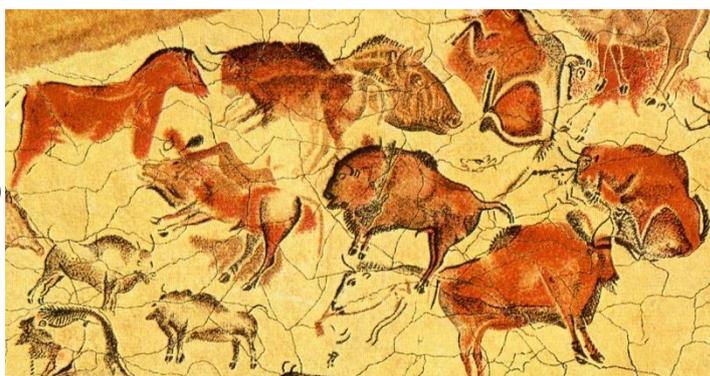
まわりの人と、色についての
イメージや、その理由を
少し話してみましよう。



絵を描く時、色ぬりをする時、折り紙をする時、
絵具でも 16 色や 24 色、色鉛筆、マジック・・・色が多い方が気分が上がります。
文房具屋さんで色数が多ければ多いほど、目が奪われてしまいます。
子どもたちも、シャープペンの入った筆箱とは別に、カラーペンの入った筆箱を
もう一つ別に持っているのをよく見かけます。

でも、これほど多くの色に、私たちの生活が囲まれるようになったのは、
つい、100 年ぐらい前からのことです。それは、化学染料つまり金属や鉱物を
石油系の物質で溶かした物が工場で作られるようになってからです。

人類は、狩りの時代から、色に魅かれ続けていました。
各地の壁画に、岩絵の具を使った芸術が残されています。
手形をとった岩絵の具の色は赤でした。



ラスコーの壁画より



高松塚古墳の壁画の衣装の色も、美しい物でした。
緑色の衣装の色は緑青(孔雀石を砕いた顔料)で
描かれているそうです。



いつも思い出す話があります。

歴史の授業でメソポタミアの土器を見た女の子が、「先生、人類は、生活に
使うだけではなくて、いつも美しい物も作りたいたいと思っているんだね」そう感想
を言ったという話です。

江戸時代も、武器の必要が無ければ、美しさを求めたのではないのでしょうか？

私の仮説は、こういうものです。

江戸時代の人々は、武器の技術を発達させる代わりに、その平和な生活を豊かにする技術へと、発達させていったのではないか。

人間には欲望がたくさんあると言われますが、言ってしまえば、それも欲望。まず食欲・・・お腹をいっぱいになりたい欲望、そして美味しい物を食べたいという欲望。そして次に、物欲や金銭欲・・・欲望と言ってしまえば、汚れたものに感じますが、言い方を変えれば、美しい物、楽しい物、そういう物を求めて、地域にあった物を生みだしていったのではないか。

そして、物欲や金銭欲も、おいしい物を食べたいという欲望も…人々を、商品作物の栽培や商業の発展、産業の発達に結びつけました。戦争以外のところに多大な労力をつぎ込み、それが、一般の人々にも少しずつ恩恵を与えていった平和な時代(確かにプラスばかりではなく、格差を生みだしたマイナスもありますが)と、考えるのですが、どうでしょうか？あなたはごどう思われますか？

江戸時代には、英雄の話は少ないです。でも、名も無い人々が考え出した技術が、今の私たちの生活の中にたくさん生きているように思います。

例えば、260年間の江戸の平和から生み出された物に私たちは囲まれています。

お正月、お雑煮を食べ(出汁をはった餅の入った美味しい汁)、
晴れ着を着てお年玉をもらう。お雛祭りで人形を飾り、雛あられ
を食べる・・・七夕飾りを飾る・・・月見団子を食べる・・・。



行事ごとの食べ物やしきたり、慣習も人々の楽しみになっていたことが、今の時代につながり、今でも私たちの楽しみにもなっています。

日本の四季の行事の楽しみが無かったら、どんなに味気ないことでしょう。

江戸時代の人々が作りだした財産の中から、
色と灯りについて考えてみたいと思います。



3 色はどうやって作るの？

化学染料が発明されない時代に、空の青、葉の緑、炎のオレンジ、紅葉の赤や黄色、自然界にある色を再現しようとした人類は、どうやってその方法を見つけていったのでしょうか。

それを考えるだけで、人類の色に対する憧れや情熱の深さに、気の遠くなる思いがします。

しかも、そのさまざまな色を、自分たちが着ている物の色として再現したい・・・その欲望は、他の動物には存在しない欲望なのに、古代からその方法は発明されているのです。何千年も前から存在する、その技術はすごい物だと思います。

そして、染料が貴重であればあるほど、古代から、身分が高い人々だけが着ることを許された色になっていました。

さて、身分が高い人々が着る色と普通の人々が着ていた色を分けてみましょう。国によって、時代によって違うので、大まかな仮説、大胆な推理として考えてみてください。

身分の高い人々の色は？

普通の人々の色は？

何色を高貴な色、何色を庶民の色にしましたか？

絵を描く時の顔料(石を砕いた物)と違って、布を染める染料は、植物由来の物がとても多いのです。それは、色の種類となって、色の名前になっています。

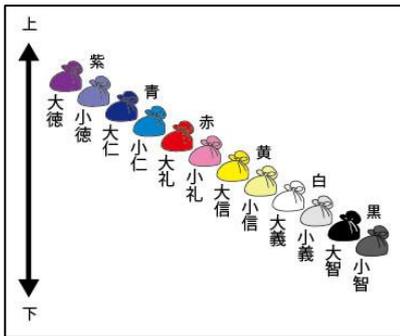
今は、色の名前は、多くがカタカナ、そして英語を使う場合が多いですが、日本独特な色の名前がたくさんあります。よく、古文の勉強の時に出てきます。

いくつか挙げてみましょう。

英語の色の名前

日本の色の名前

色で身分を表わしたのは、よく知られるように、聖徳太子の冠位十二階制です。



冠位十二階制と言って身分は 12 に分かれています、色は 12 種類ではありません。

これはどうしてでしょう。

今回調べたところ、また驚きました。

この微妙な差で 12 に分けた身分の差は、濃い色と薄

い色とで身分を分けたと書いてありました。

さて、濃い色が身分が高いのでしょうか？低いのでしょうか？・・・そしてその理由は何？

答えは、薄い方が身分が低い、濃い方が高い、でした。

その理由は、染色は天然染料でやる場合、紫外線でも退色しない為には、濃く染める必要がある。そして何度も染料・媒染剤と浸し、乾かして・・・という作業をくりかえして、大変な手間が必要なものなのです。手間と時間と技術が必要な濃く染めた物ほど身分が上の方が身に着ける・・・そういうことだと思います。

また、古代や中世のヨーロッパでは、同じく紫(貝紫)が貴重だったために、ロイヤルパープルとして、皇帝以外、身にまとうことを禁じられていたそうです。

国が違って、中国では、黄色が皇帝の色だったので、普通の人々は着ることが禁じられていたのは、よく知られているでしょう。日本でも、それにならったのか黄土色は、天皇のみの禁色となっていたそうですが、その由来は、黄色は黄土地帯を表わし、中国発祥の地としてのプライドがそうした色への考え方と重なったためでしょうか。

紫禁城の瓦もそうしたこだわりから黄色い瓦で葺かれています。



色の名前については、ここで紹介しようと調べたところ、色の事典があるくらいで、とてもすべては紹介できるものではありませんでした。

それでも、日本の色の名前もいくつかあげましょう。



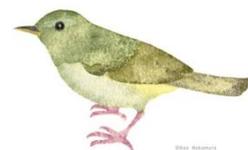
あかね
茜色 = 夕焼けの色に使われますね

あい
藍色 = 濃い青、その深い色が特徴です。

うぐいす色 = 緑に茶の混じった感じ、鳥のうぐいすから来ているのですね

茶色 = 茶を染料として使った時の色だそうです

おうど色 = 中国の黄土の色という意味ですね



こんなふうに、日本の自然、動植物からとった色の名前が多いこと多いこと……。

色の名前を読んでいると、山や川や植物が次々と頭に浮かんでくるようです。

水色、桃色、山吹色、だいたい色、鉛色、ねずみ色、瑠璃色……



その中でも染料由来の色をいくつか例として、あげてみましょう。

藍色



藍の葉を発酵させます。右は藍玉。

茜色



根を染料とします。

むらさき
紫



むらさき
紫と呼ばれる植物の根を使います。

染料としては紫根。絶滅危惧種になるほど貴重な物です。

貝紫



巻貝の内臓から染料を取り出す。

吉野ヶ里遺跡の布に貝の染色の痕跡があるそうです。

紅



えんじ
臙脂



紅花の花卉を発酵させて使います。

カイガラムシから染料をとります

右は花餅。

飛鳥時代に紫は高貴な色でしたが、紫根を何度も染めて手がかかるからこそ高貴なのか、貝紫で染めたのか…とにかく貴重な色であることは納得できます。染料としての植物の中にも、ウコン(インド原産)や藍(これも元来インド由来の植物で英語名はインディゴ)、動物染料としてのカイガラムシ(東南アジア)などがありますが、これらは、海外でないと採れない物、栽培技術が必要な物です。

これは、やはり手間暇とお金がかかるからこそ、長い間、庶民のものではなかった、そう言えるでしょう。

それが、江戸時代は、260年もの間に、各藩で栽培を奨励したり、技術を広めていく中で、人々の着る物が、彩・華やかさを増していったのです。

人々が日常着として着る木綿がよく染まるのは藍。藍染めでも、多様になり、糸を染める緋・布を染める絞り、そうした技法が生まれます。

絹はぜいたく品で、日常着ではありませんが、江戸後期になると、ハレの席に人々は絹を着たがるようになります。人々がさまざまな模様を身に着け、派手になっていくのを、幕府がぜいたく禁止令を出して制限しようという時、人々はその抜け道の「小紋」を作りだしました。遠くから見ると柄が無いように見えて、実はとても贅沢。そのなんとしてでも柄を着たいという気持ちを支えたのは、柿渋の型紙です。水に強く何度染めても繰り返し使える和紙。そして型紙を切り抜く良質な刃物。

紅花で布を染め、唇に紅をさす。そのおしゃれに憧れて、都の人々が買い求め、栽培の難しい紅花が、山形で一大産業になり、日本海航路の北前船が発達する…。紅花栽培はとても難しいけれど、時期と気候と需要を考えて、大成功を収めた経

営者が大地主になる。紅花生産者と北前船を運航する商人は、知恵とチャンスをうまく生かせば一攫千金もあるけれど、天候不順の年に大失敗して、土地を失い小作人になる農民もいた。

こうして人々が美しい物を求める気持ちは美しい織物の技術を発達させました。実際の染料を手にしてみると、発酵の過程を経る物もあるので、その匂いに驚かれるでしょう。それでも、色をまといたいという情熱が、匂いなど克服してしまう・・・そのことにも驚くと思います。

そして、発達すれば、貴重なものであっても、少しずつ量が増え、少しずつ人々の物になっていきます。

七五三に、成人式に、女の子や女性が、ドレスではなく華やかな着物を着るのは、そうした江戸時代からの憧れが引き継がれているのではないのでしょうか。

貴重な染料と、それを日本各地に広げていった技術、その不思議な関係を、ぜひ映像で見てください。特に、貝紫は天才テレビ君のほんの5分ビデオですが、驚かれること間違いなしです！！

江戸時代に広がった色の世界・・・それを象徴する二つの体験をしてみましよう。

一つは絹を天然染料で染める・・・ただし繭玉です。

もう一つは、和紙を染料で染める・・・これは遊びなので、染めやすい化学染料でやり、おもちゃを作ります。

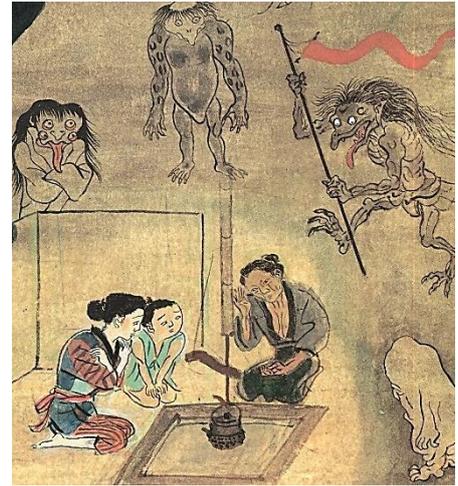


4 人は暗闇が嫌い？

みなさんお化けは好きですか？

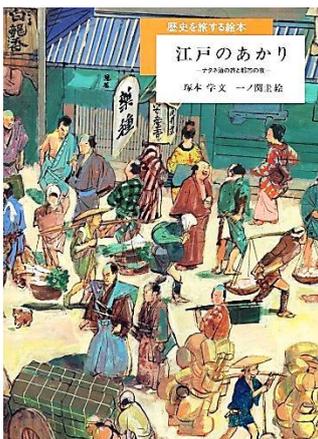
今でも信じている人たちもたくさんいますし、ゲゲゲの鬼太郎は大人気で、私も好きでした。でも、今の時代にあまり人々が信じないのは、夜、暗くないからでしょう。

みなさんは闇夜というのを経験したことがありますか？ 月の無い晩に、街灯も懐中電灯も無く、外に出てみると、一寸先=30cm先も見えない・・・その恐ろしさを知るとお化けも出てくるのも納得できます。



人類が何万年前から、火を灯りとして使ってきたように、夜の闇をどう乗り越えるのか、それは、いつも大きな関心を持たれてきました。平安時代には、都の半分以上が闇に包まれ、四つ辻は异界に通じていると信じられていましたし、その後も、鎌倉時代も、室町でも、夜の明りは、ずっとかがり火や松明でした。平和だった江戸時代には260年間でどう闇を乗り越えてきたのか、それを今度は考えましょう。

今の明りは電気です。電気が無い時代は、物を燃やすことが灯りを作ることでした。家の中で物を燃やす・・・灯りにもなり、暖も取れる・・・それが囲炉裏です。しかし、江戸時代はさらに発達し、庶民も明るい夜を少しずつ過ごせるようになりました。それを描いた絵本があるので、それを読んでみましょう。

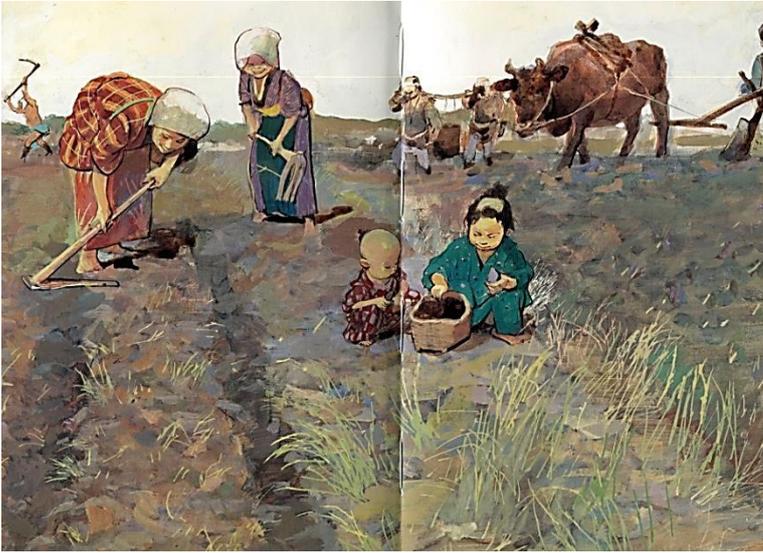


歴史を旅する絵本

『江戸のあかり 一菜種油のたびと都市の姿』より

塚本学・文、一関圭・絵

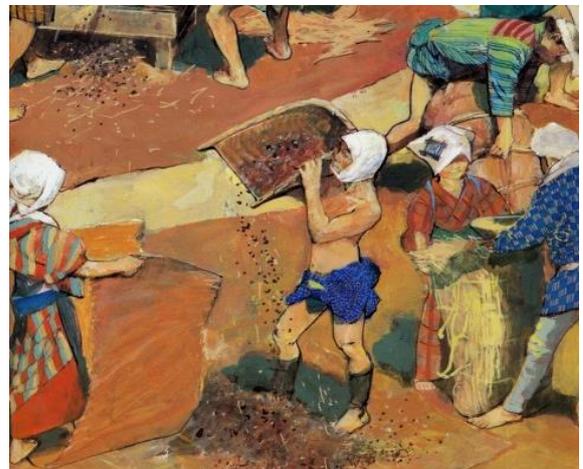
岩波書店：1990年



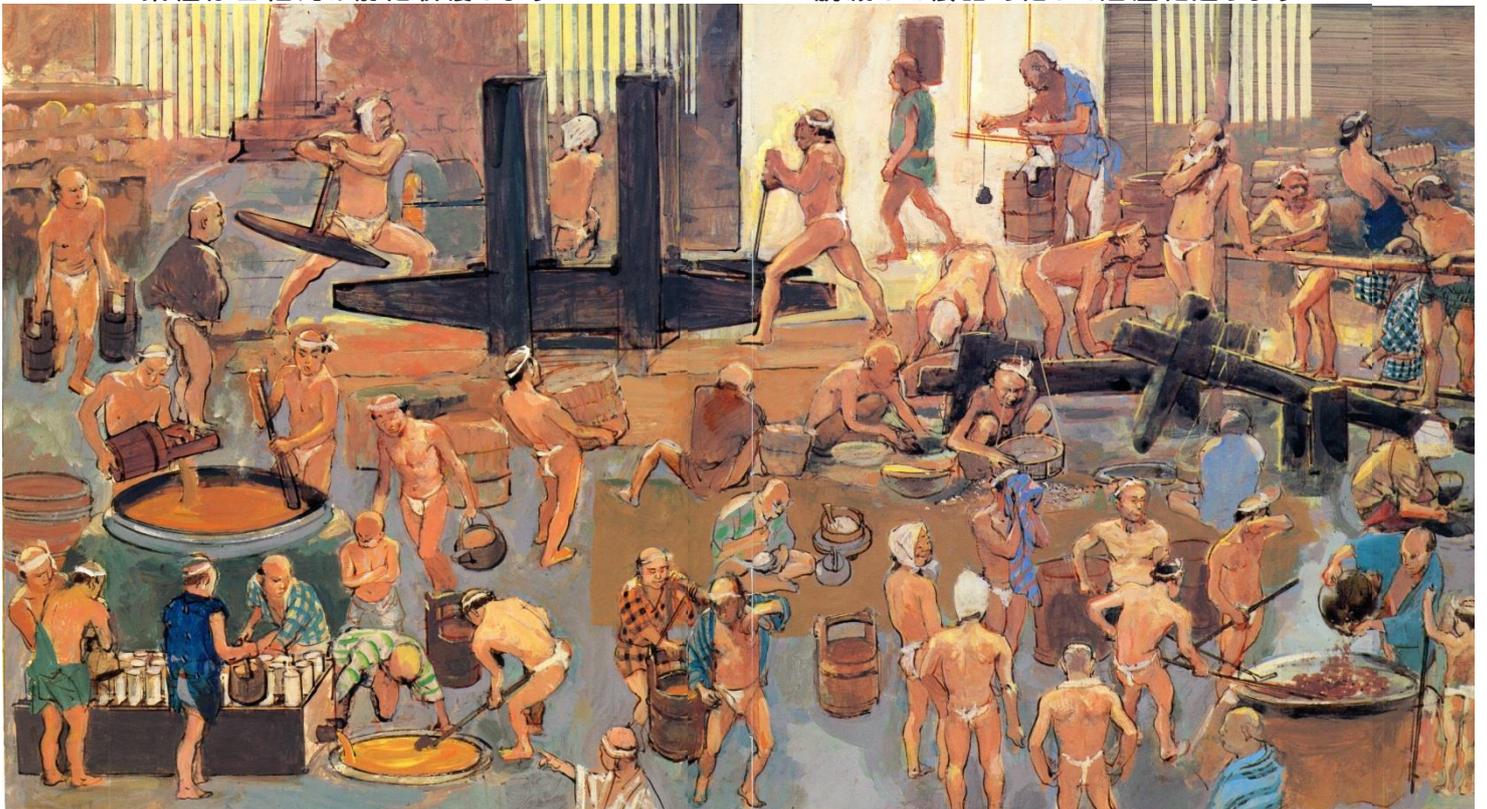
稲の収穫が終わると、淀川べりの大坂の地では、田をもう一度耕し、菜種の種をまきます。
春には一面の菜の花。蕪村の句もそうした光景を描きます。菜種油は、灯りや天ぷらにも使われました。



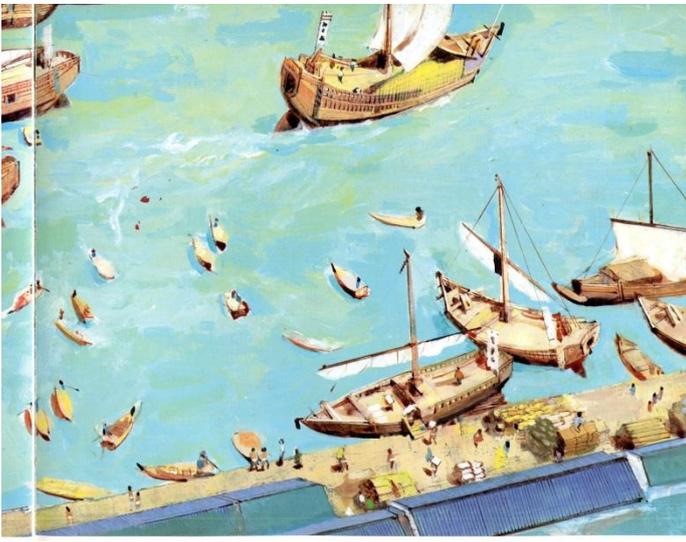
菜種は田植えの前に収穫します。



脱穀して俵詰めにして油屋に送ります。



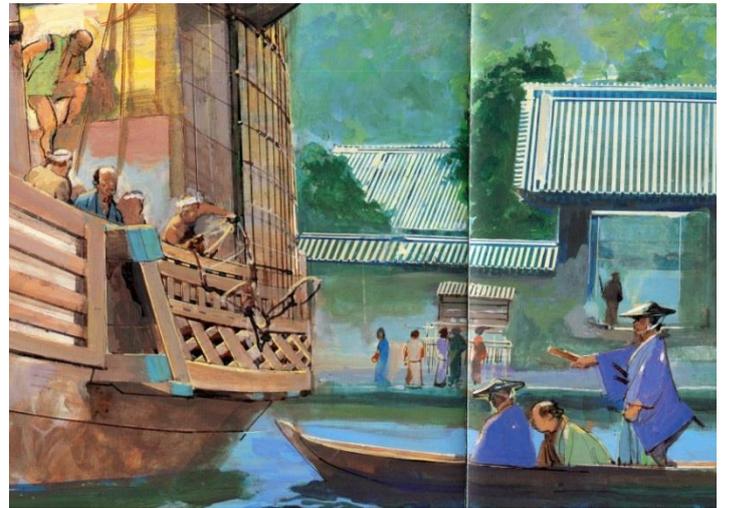
油屋の工場制手工業。手間と道具と労力が必要なため、こうした施設には30~40両が必要でした。
菜種を炒り、つぶし、圧力をかけて、油を抽出します。油かすは肥料にもなります。



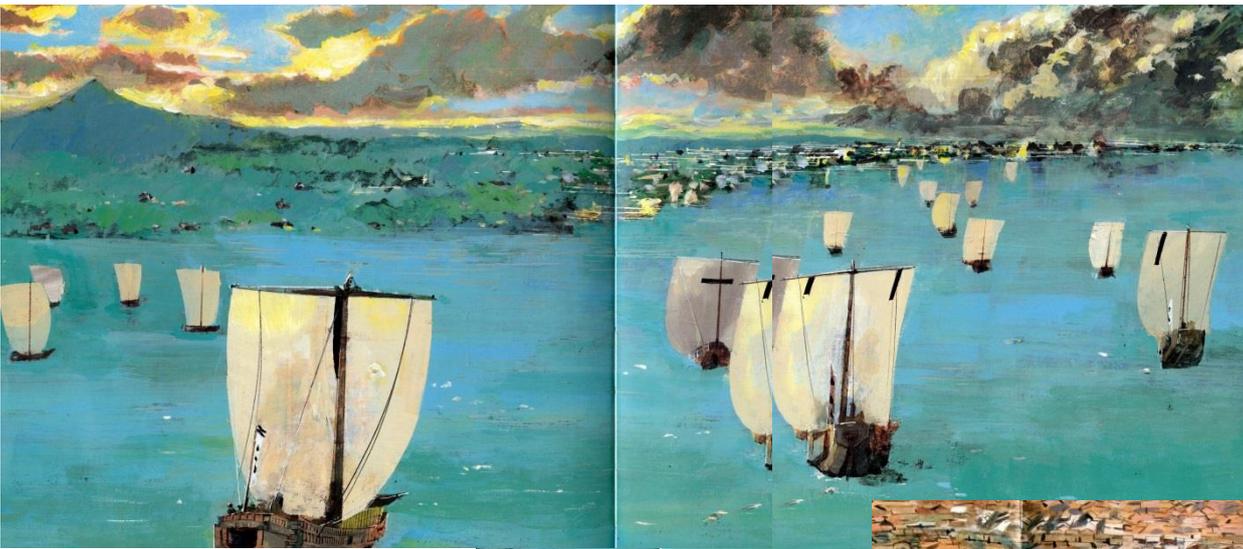
油は、樽に入れて、大阪港から積み出されます。



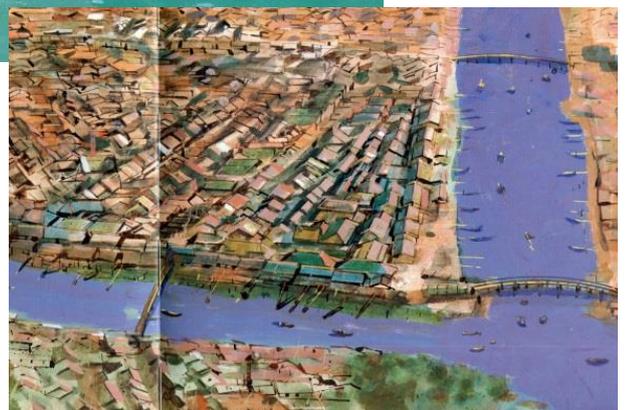
嵐を超えて、江戸まで運ばれます。



遠州灘を超える菱垣廻船。灯台の明かりが見えます。 浦賀に着くと番所の検査が待ち受けます。

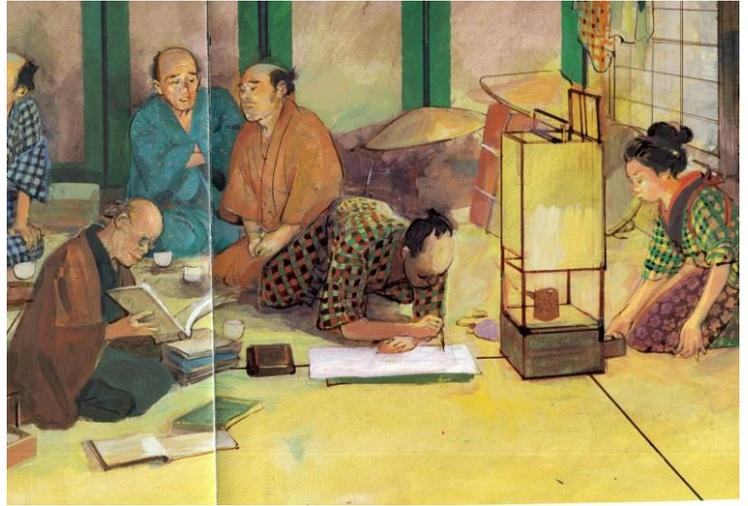


さあ、江戸湾に入ってきました。
江戸の水路沿いに問屋街があります。
油問屋は、日本橋や深川のあたりにあり、
菜種油の樽は、土蔵に入れられます。

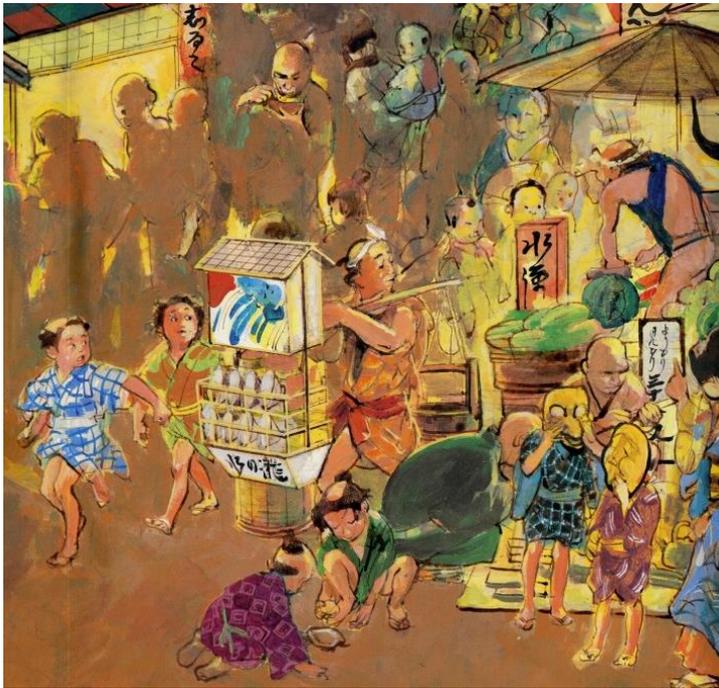




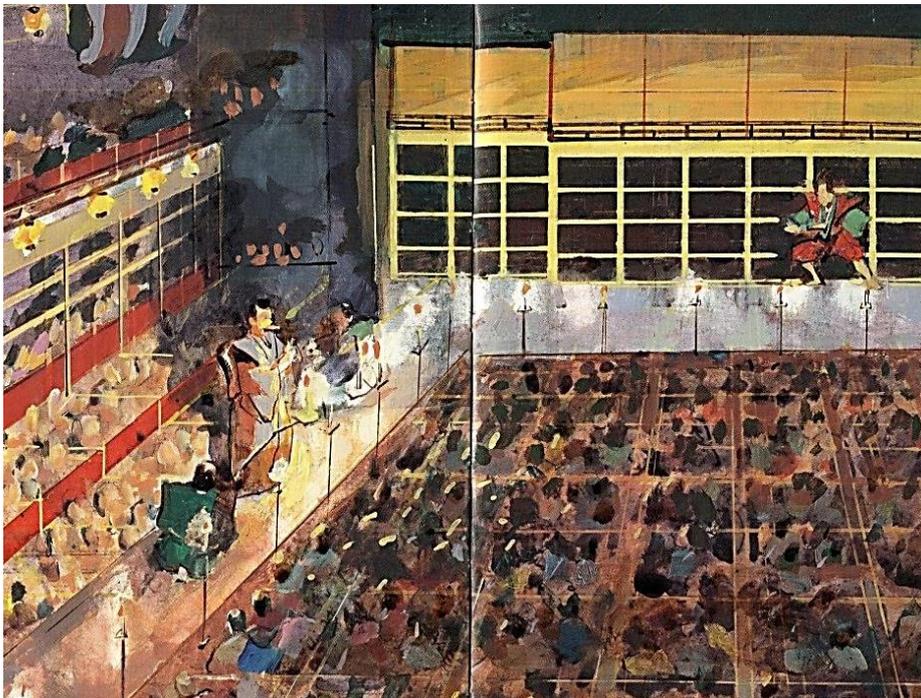
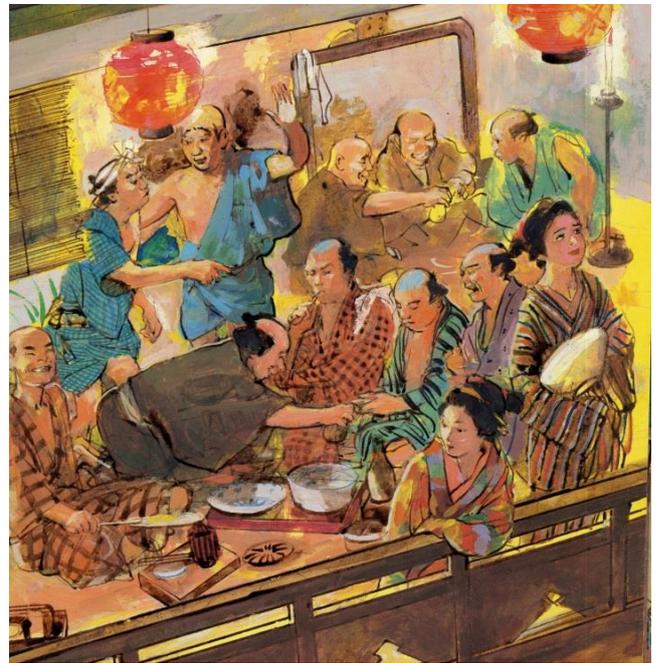
町に行く油売りが、天秤棒にかついで売ってまわります。人々は油どくりや入れ物を持って買いに来ました。



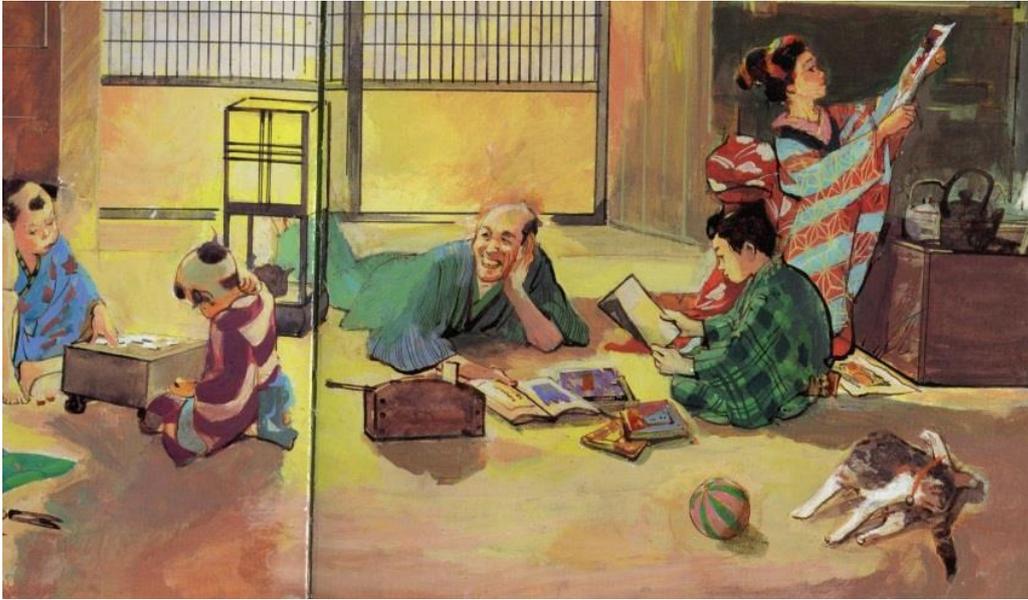
村から来た農民が、明日の裁判を前に文書作りを宿の主人に頼んでいます。



両国の夏の夜はにぎやかです。屋台や物売りが並んでいます。夜の宴会は、江戸時代でも盛んでした。



芝居小屋も華やかな遊び場でした。夜でなくても、役者の表情や衣装を目立たせるために、ろうそくを盛大に灯しました。それだけではなく、今のスポットライトのように、小道具係が、役者を大きなろうそくで照らします。



町家では、大人も子供も夜でも貸本を読んだり、将棋で遊んだり、楽しい夜を過ごしています。



長屋住まいの貧しい暮らしの人々は、油代が高いために、煌々と明るくしておくことはできませんでした。
しかし、小さな灯りが、縫い仕事の稼ぎを可能にしてくれたのです。
右の方にある瓦灯の上のろうそくが見えますか？



大名屋敷でも、吉原でも、長屋でも、灯りを小さくして、人々は眠りました。

少し明るくなった(今から比べると)江戸の町ですが、そのために、火事も増えました。

今度は、火事を防ぐ工夫も人々は考えだします。

5 実際に、灯りをともしてみよう。



江戸時代の明るさを体験してみましょう。

場所は真っ暗になる部屋が必要です。できれば視聴覚室や理科室のように、暗幕のある部屋がいいと思います。

用意する物は、燈明皿に(お刺身の付皿みたいなもので十分)、菜種油(キャノーラ油)、木綿の紐。紐を5cm位切り、油に前もって浸しておいて、マッチで火をつければ、江戸の灯りになります。

和ろうそくも灯してみて、燈明とろうそくの明かりの違いも体験してみてください。思った以上にたぶん暗いと感じるでしょう。

でも、意外に友達の顔が、ほんのり浮かび上がって、おしゃべりするには、とても和やかな雰囲気生まれると思います。

私が中学生と体験した時には、10分あまりも、灯りを囲んで静かに、班ごとにおしゃべりをしていました。

提灯や行燈も手に入れば、試しに使って、江戸時代を想像してみてください。

6 江戸の技術が、今の日本企業の精密さの元祖？

染色の技術をDVDなどで見ていると、その手間暇と技術の細かさに、驚かされます。江戸時代の技術は、時間にかけては、とても贅沢です。

それが、江戸時代の特徴だと思います。何年も修行して習得する専門技術、そして、職人魂というか、究極のこだわりが、その技術の伝統の中に残されています。

今の時代は、100円均一の世界が標準といってもいいくらい。安くて速くて質もそこそこ。

そんな今の価値観からすると、江戸時代のように今も手間暇をかけ、時間をかけて少しの物を作るのは、合理的ではなく、手作りの物は逆に高く、手に入らない物になってしまいました。

しかし、江戸時代は、大量生産ではなく、リサイクルの時代だったのです。いい物を何度もくりかえして使う。そのためには、最初からいい物を作らなくては耐久性がありません。NHKのタイムスクープハンターの番組では、紙のリサイクル屋さん、髪の毛をカツラにするために回収する商売の人が出てきます。

今と江戸時代は大きく違うことは確かですが、それでも、技術を究極まで突き詰めることが必要な場合、日本の江戸時代のそうしたこだわりは有効なのではないでしょうか。日本人の中の細やかさはそこから来ているのではないのでしょうか。・・・・下町ロケットの小説にあるような、繊細な技術が必要とされる場合にこそ、260年のこだわってきた精神が生かされるのではないか。下町ロケットの元祖は江戸にあり！！

私の問題提起をきっかけとして、江戸時代260年、戦争をせず、生産力と技術力に時間を使った時代について魅力ある授業を、みなさんに作っていただければ幸いです。

江戸時代の授業

ねらい

- ① 江戸時代の 260 年間の平和に焦点を当てる。
- ② 武器の技術発達が必要なれば、人々は生活向上を目指す。
- ③ 人々は美しい物を求め、夜を明るくしようとした。

授業の構成

．．．．．実際の授業の場合は、**1**・**2**は省略しても良い

- 1** 江戸時代の平和の意味を考える。
- 2** 江戸時代はおもしろくない？というイメージはどうか。
- 3** 色の種類をあげてみよう。(今の色と昔の色、名前、)
- 4** 色に身分の上下はあるか？
- 5** 色はどうやって作るのか…布を染める染料の実際
DVD で、江戸の技術を見てみよう。
繭を自然染料で染めてみよう。
- 6** 江戸時代の明りは何が使われたらう。
「江戸のあかり」の本から
明りに使われる菜種の栽培から江戸の消費まで
- 7** 実際に灯りをともしてみよう。
燈明皿で菜種油の明りを試す。
和ろうそくで灯りをともし。
提灯に灯を入れてみる。
行燈を使ってみる。(古道具屋さんで手に入れてみよう)

資料

灯りについての解説

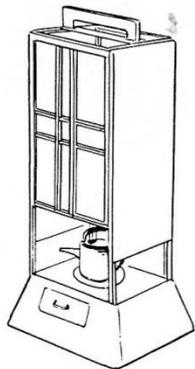
「江戸のあかり」から

面あかり <38 ページ>

歌舞伎の芝居小屋がにぎわうのは、今とちがって夜ではありませんが、役者の名前を書いた大きなちょうちんなどがかがげられて、はなやかな気分を盛り上げました。舞台の全体的な照明という考えは少なかったようです。ただ、部分照明として舞台や花道で役者の前後に長い柄をつけた燭台を差し出し、その表情を強調することがありました。大きなろうそくを使い、差し出しとか面あかりとかよばれました。

あんどんとぼんぼり <40~41 ページ>

あんどんは、江戸時代の室内での照明用具としてたいへん一般的なものでした。当時の家は風通しのよい建物でしたから、油を入れた皿の上でもやす火だと、風が吹くとゆれたり消えたりしますし火事の危険もあります。そこで油皿を、紙を張った枠でかこんだのがあんどんです。釣り手や掛け手をつけて手下げ用にも掛けあんどんにも、台をつけて置きあんどんにもなり、置きあんどんでは枠のかたちで、四角い角あんどんにも丸い遠州あん



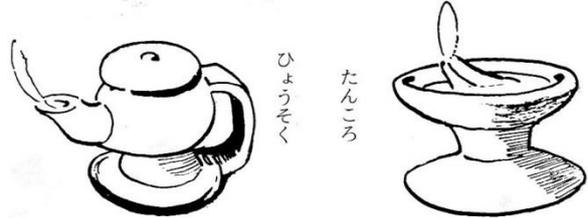
あんどん



ぼんぼり

どんにもなりました。台には灯心や点火用の付け木などを入れる引き出しをつけるほか、枠を二重にして開け閉めできるようにし、寝るときには照度を下げる工夫も加えられました。紙を通してあかりがやわらかくなり、室内調度品としてこったデザインのものも少なくありません。ぼんぼりの方は、もともとろうそくを立てる台からはじまったものですが、これも紙で覆われるようになって、みたかたちはあんどんとあまり変わらないようになりました。

あんどんのほかに、ずいぶんさまざまなものが同時に使われていました。ひょうそくやたんころは、油皿に火をともししんを入れる上での工夫で、この工夫はあんどんにも適用されますが、風囲いなしでこのまま用いられてもしました。ひょうそくは、油皿のふちをしんを置くために開けたり、油皿を急須のようなかたちにしてその口にしんを入れたりする装置です。たんころは、油皿の中央にしんを安定させるために筒のようなものをつけたものです。

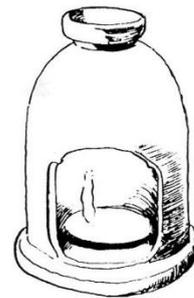


ひょうそく

たんころ

瓦灯 <43 ページ>

瓦を焼くのと同様に土で作った照明具です。台と釣鐘形で窓穴の開いた大きなふたのようなものと油皿とのセットです。このふたの上に油皿を置いて火をともします。寝るときには、台の上に油皿を置き、ふたで覆うからずっと暗くなります。あんどんを使うよりもっと油代を節約しなければならぬひとびとに使われた道具でしょう。



瓦灯

江戸のあかり

定価1750円(本体1699円)

1990年2月8日 第1刷発行 発行所：株式会社岩波書店 101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 電話03-265-4111振替東京6-26240
印刷：大日本印刷 製本：三水舎 Text copyright © 1990 by Manabu Tsukamoto Illustration copyright © 1990 by Kei Ichinoseki

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN4-00-110646-9